
異世界からの勇者と闇の皇女

土岐宮 左京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からの勇者と闇の皇女

【Nコード】

N8245Y

【作者名】

土岐宮 左京

【あらすじ】

平々凡々に生きていた時坂ときさか 陽ようは突然異世界に召喚される。異世界に召喚した術者であるセフィリア・アークラルドと共に戦うことを余儀なくされた陽の物語です。

ありきたりな異世界召喚モノだと思えます。

主人公は最強かつ無双、ご都合主義、設定は後載せ、残酷な描写やハーレム等がある予定です。

読まれる際にはご注意ください。

第一話

異世界召喚。

それは今生きるこの世界とは別の全く異なる世界に呼び出されること。

小説や漫画など物語の世界では時々見られる想像上の出来事。

「……………へ？」

俺はその言葉を聞いたとき、呼気のような言葉にならない声を上げてしまった。

その言葉とは、異世界召喚モノの小説や漫画でよく目にし、ゲームでは音声付きで見た言葉。

異なる世界から問答無用で呼び出した者にかける第一声として有名な、いや悪評高い言葉。

「お待ちしていました、勇者さま。どうか、どうか私たちをお救いください。」

目の前にひざまずき、手を合わせ拜むように懇願を口にする少女。

その少女が懇願する様は神にすぎる弱者のようであり、英雄を虜にする娼婦のようでもあった。

普通の男なら少女の容姿と相まって、誘導されたかのように頷いてしまっだろう。

そう確信できてしまうほど、少女の容姿は素晴らしい。

艶やかで煌びやかな輝きを放つ白金の髪。

透き通るような翡翠色の瞳。

鼻筋がすっと通っていて道を歩けば十人が十人振り返る整った顔立ち。

そんな美しい少女が上目遣いでこちらをうかがい、懇願してくるのだ。

ほとんどの男が魅了され、頷いてしまうことは明白だ。

だが俺は普通ではない、らしい。

らしいというのは自分ではいたって普通だと思っているのだが悪友たち曰く、理性が強すぎる、人間の精神とは思えない、と。

確かに、誰しもが魅了されるであろう少女の懇願を見ても心が少しも動かないのだから理性が強すぎるというのはあながち間違いでもないのか。

「勇者さま？」

少女の呼びかけに思考の海から我に返る。

どう考えても少女が口にする”勇者”とは俺のことを指しているとしたか考えられない。

「えっと…確認だけど、勇者って俺のこと？」

念のため確認すると少女は、はい、そうです、としっかりと頷いてくれやがった。

薄暗さによりやく目が慣れてきて周囲の状況を視覚に捉えることができるようになった。

キョロキョロと落ち着きなく見えるように周囲を見回し、今いる場所の広さとそこにいる人数を把握する。

今いる場所は一辺がだいたい五十メートル程度の正方形の部屋のようだ。

人数はざっと数えて三十人ほど。

どごその小説の主人公みたいに闘争と逃走する、なんてことができような人数ではない。

眼を閉じ、右手で頭を掻きながら考えること数瞬。

意を決した俺は眼を開け、目の前の少女を見つめる。

「期待に添えるかわからないけど、俺でよければ力になるよ」

噛まずに言えた言葉はそれだけ。

目の前の少女は頬を朱に染め、瞳には涙が今にもこぼれんばかりに溜まっている。

言葉が出ないのか少女は深々と頭を下げてきた。

少女はひざまずいているので俺に対して平伏しているようにも見える。

周囲を取り囲むように立っていた人たちは少女の様子を見て慌てたようにひざまずき、頭を垂れた。

その後、俺は案内されるがままに部屋から出て別の部屋へと案内された。

案内された部屋で待っているよう頼まれた俺はふと自分の恰好や持ち物が気になり、調べることにした。

「服は変わってない」

姿鏡に自身の全身像を写し、変化がないことを確かめて言葉にする。ウール地の黒いピーコート、白の襟付きシャツ、インナーはハイネツクの長そで。

黒革のベルトに濃い青のジーンズ。

くすんだ茶色で足首まであるハイカットなレザーシューズまで、全身を見回してみたが何も変わってはいない。

肩から斜め掛けしたシオルダーバックもそのまま。

中身をざっと見てみたが特になくなったものもない。

「やっぱりケータイは圏外か。ま、仕方ない」

ポケットから携帯電話を出すも画面に映るのは圏外の二文字。
今後のことを考え、携帯電話の電源は切っておくことにした。

第二話

携帯電話の電源を切り、シヨルダーバッグの奥に埋めたところで扉がノックされる。

返事と同時に扉が開き、先ほどの少女が入ってきた。

「お待たせいたしました、勇者さま」

入ってきた少女がスカートを摘み上げ、優雅に頭を下げる。

西洋の中世時代が舞台のアニメで貴族令嬢がやっていた挨拶に見える。

「ご挨拶が遅れてしまい申し訳ありません。遅ればせながら自己紹介をさせていただきます。」

少女は頭をあげこちらを見てくる。

どう返したものがわからなかったので、見返すことしかできなかつた。

「私（わたくし）の名前はセフィリア・スクシ・アーケラルド。アーケラルド皇国の第四皇女です。」

少女の自己紹介を聞き、俺はああ、やっぱり、としか思わなかった。召喚を行うのは王女が定番。

先入観に加え、少女の言葉づかいかや立ち居振る舞いからしてそうじゃないかとは思っていたのだ。

「本来であれば王である父が勇者さまにご挨拶せねばならぬところ。私のような若輩者が代わりにご挨拶させていただくことになり、申

「申し訳ございません」

申し訳なさそうな顔で謝罪の言葉を口にされる。

「あ、ああ。…つと、王様には俺から謁見をするんじゃないのか？」

俺の問いに第四皇女は勢いよく首を横に振る。

「いえ、私たちの世界を救っていただく勇者さまに、王への謁見などしていただくわけにはまいりません。王が勇者さまへ頭を下げるここそありますれど、勇者さまが王へ頭を下げることなどありません。」

強く否定する第四皇女に俺は好感を抱く。

今まで読んだ小説でも、遊んだゲームでも、王様というのはかしくかれて当然、という雰囲気があった。

俺はそれがあまり好きではなかった。

自分の世界の問題を他の世界の人間に解決させるのに、依頼主が偉そうというのが個人的にはとても納得できなかったのだから。

だが、想像上の出来事と現実ではやはり違うようだ。

「そうなのか。あ、俺も自己紹介をしておくよ。名前は時坂陽。こち風に言えばヨウ・トキサカ、かな。どれくらいの付き合いになるかわからないけどよろしくお願いするよ」

「勇者さまのお名前はヨウ・トキサカさまとおっしゃるんですね。こちらこそよろしくお願い致します」

第四皇女セフィリアは笑みを浮かべて軽くうなずいた後、俺に対し深々と頭を下げる。

その姿を見た俺は、ふと昔読んだ小説の内容が頭に浮かんだ。その小説とは、俺と同じように異世界に召喚された主人公が聖剣という名の枷を付けられ、王家の言うがままに働かされる、というものだ。

小説という想像上の物語のことではあるが、俺は緩みかけた気を内心できつちりと引き締める。

召喚されたということは、魔法かそれに類する力があるのだろう。物質に作用する力があるのはわかったが、精神に作用する力がないとは限らない。

いくら気を引き締めたところで無駄かもしれないが、やらないよりはマシだろう。

「それで、救ってくれて言っただことの説明をしてくれないか？」

セフィリアが頭を上げるのを待ってから俺は声をかける。

いままでと変わらない様子になるよう努めて心がけた。

そのおかげか、セフィリアは俺を疑うようなそぶりも見せず、顔に浮かんでいた笑みが一瞬のうちに悲痛なものへと変わった。

「はい、かしこまりましたわ。ご説明させていただきます。ヨウさま、申し訳ありませんが付いてきていただけないでしょうか？」

セフィリアの言葉に黙って首肯すると、置いてきたシオルダーバツグを拾い上げる。

セフィリアの方を見ると、セフィリアは悲痛な表情を隠そうとわずかばかりの笑みを浮かべた。

そしてセフィリアに先導され、待たされていた部屋を後にする。

この後にされるだろう現状とはどのようなものを予想しながら俺は歩く。

予想の斜め上のことが話されるとは、歩いているときには想像だに

できなかった。

第二話（後書き）

あんな一話ですがお気に入りに入れてくれた方がいらっしやると思いませんでした。

この場を借りてお礼申し上げます。

本当にありがとうございます！

第三話

セフィリアに連れて行かれたのは書庫のような部屋だった。

壁にはこの世界の地図だと思われる模様が描かれたものがかかり、部屋には天井まで届く本棚が並んでいる。

本棚に視線を向けると中にはぎっしりと本が詰まっていた。

「それでは早速ですが、ヨウさまをお呼びさせていただいた理由をご説明させていただきます」

地図だと思われる模様が描かれた壁を背に立ち、セフィリアは再び俺へと頭を下げる。

俺は周囲の観察を止め、セフィリアの方に向き直った。

「私たちは現在、侵略を受けております。このままでは私たちは滅亡するしかありません」

俺が呼ばれたのは侵略者への対抗手段としてか。

「私たち魔族^{マソク}は、鬼族^{オニソク}、獣族^{ケモノソク}、亜族^{アソク}と共に侵略者に立ち向かってまいりました。ですが長きにわたる戦いで多くの者が息絶え、私たちが住んでいた場所は次々と破壊され、占領されてしまいました」

複数の種族がいて協力体制は築けている、と。

長期戦になって戦える人がいなくなってきたから勇者を呼んだってわけか。

「すでに鬼族、獣族、亜族の皆が住んでいた土地は全て侵略者に奪

われてしまいました。彼らの土地から海を隔て、遠く離れたこの魔族の地だけが今の私たちに残された地です。ただ、この魔族の地も半分は侵略者に奪われてしまっておりす

セフィリアが地図と思しき模様の中心、円形に近い形状の図形を指示した。

「この中央に描かれているのが私たち魔族の地です。周囲は海に囲まれ、大陸からも離れた場所にあります」

どこの世界でも自分の国を世界地図の中心に描くというのは変わらないんだな。

というか、壁にかかっていたのはやはりこの世界の地図だったようだ。

セフィリアが示した場所と同じ色あいの模様が地図の上下左右の端に記載されている。

同系色だから端に記載されているのが大陸なのだろう。

そんなことを考えていると、セフィリアが示した島を横半分に横断するように指を動かした。

「ここより南にある魔族の地は全て侵略者に奪われてしまいました」
奪われた、と口にしたときセフィリアの真剣な表情に悲しみがよぎる。

「現在、我らの地を横断するように戦線が伸びてしまっています。鬼族の方を筆頭に四種族が力を合わせて戦線の維持を行っている伺っています」

だが、こちらを向いたセフィリアの顔にはもう悲しみはなかった。

そのセフィリアの所作に人の上に立つ者の覚悟、みたいなものを垣間見たような気がした。

「えっと、質問、いいかな？」

「ええ、もちろんです。どうぞ、ヨウさま」

唐突に挟んでしまった俺の言葉に、すぐさま頷きを返してくれた。

「この世界に人族や人間ヒトソクと呼ばれる存在はないのか？」

さっきからずっと気になっていたこと。

セフィリアは自らを魔族と言い、他に鬼族、獣族、亜族と呼ばれる種族がいることはわかった。

だが人族という名称が出てこない。それが俺の気になっていたことだ。

いや、他にも話を聞いていろいろと気になることはあるんだが。

「人族、ですか？そのような種族は聞いたことはありません」

わずかに考えるそぶりを見せた後、セフィリアは首を横に振った。

「私たち四種族全てを指して人間、と呼んでいます」

セフィリアの言葉に俺は頷くこともできなかつた。

全く予想していなかったことを言われたからだ。

小説やマンガだと異世界の人間が同種族を召喚し、魔物や魔王から世界を救うつてのが定番だったたる。

魔物や魔王が侵略者に変わっただけだと思っていた俺の頭は、耳から入ってきた情報に戸惑うばかり。

「ヨウさまにお願いしたいことは、侵略者の手から私たちを守って
いただきたいのです」

黙り込んでしまった俺にもう質問はないと思ったのかセフィリアが
説明を再開した。

「異世界の魔族であるヨウさまは、この世界の人間全てを超越した
お力をお持ちです。私たち魔族よりもはるかに多い魔力、鬼族より
強靱な体、獣族より鋭敏な感覚、亜族より豊富な知識。これらを兼
ね備えたヨウさまであれば、侵略者がいかに強大であっても少なく
ない打撃を与えることができると信じています」

戸惑ったままの俺の頭ではあったが、セフィリアの話を聞くことが
できた。

そしてセフィリアの瞳にすがりつくような、悲壮な輝きがあること
も見て取れた。

なんだか諸々が都合いいようにできているが、今は置いておこう。
美少女に信じている、なんて言われたらとりあえずは受けておこう
と思うのが男だと俺は思う。

「姫さんの頼みとあらば力になるよ。俺なんかにできることはたか
が知れてるだろうけどな」

第四話

セフィリアからの説明を引き続き受けた俺は、今は自分の能力確認の為に中庭に案内してもらっているところだ。

力になると言った後、セフィリアは感極まったのか大粒の涙を流して泣き出してしまった。

美少女が口元を手で押さえ、涙を流す様はなかなか絵になるものだと思う。

ハンカチを出して目元を拭い、涙を止めたセフィリアが説明の続きをしてくれた。

その内容は、四種族の容姿や現在の協力体制、それから侵略者の情報について、だった。

ちよつと頭の中でおさらいをしておこう。
まず四種族は見た目で判断できる、らしい。

分かりやすく考えるため、元の世界の意味での人間、つまりは自分を基準にする。

鬼族は額の中心から一本の角が生えているいて、四種族一強靱な体の特徴の種族。

角の長さはだいたい大人の手ほどもあり、螺旋状の紋様が刻まれている。

ごく稀に角が二本もしくは三本持つ鬼族もいる。
複数本の角を持つ鬼族は、強靱な体を持つ鬼族の中でもさらに強靱な体を持つ。

次に獣族だが、簡単に言えば獣人だな。

人間に獣の耳、尻尾を持つ者から獣が二足歩行している者まで、一口に獣族と言っても見た目は多岐にわたる。

見た目が多岐にわたる獣族に共通していることとして、鋭敏な感覚がある。

五感である視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚に加え、第六感である勘

のいずれかが四種族一鋭敏になっているらしい。

いずれかが、というのはどの感覚が鋭敏なのかというのは本人の自己申告によるものらしく、どの間隔が鋭敏なのかを他者が判別する方法はないようだ。

亜族は耳の上がった人間、といった印象だ。

総じて美しい容姿を持つものが多く、知識や知恵に優れた種族らしい。

寿命も長く、外見上は二十歳代程度まで成長すると死ぬまで変わらないそうだ。

元の世界のエルフのイメージが一番近いだろうか。

「それにしても、異世界の魔族、か…」

自らの右手に視線を落とし、掌を開いたり閉じたり動かして見る。

最後にセフィリアたち魔族。

セフィリアの外見は俺がよく知る元の世界の人間とほとんど変わりはなない。

魔族の特徴は他の三種族に比べ、より多くの魔力を持つこと。

魔力は魔法の元らしく、その辺は元の世界の小説やマンガと同じだ。

セフィリアから魔族の説明を聞き、俺は本当に異世界に来てしまったんだな、と思ったよ。

「ヨウさま、こちらです」

俺の数歩先を歩くセフィリアが足を止めて振り返り、右手を挙げて指し示す。

振り返ると同時にスカートが舞い揺れ、セフィリアの可憐さに目を奪われかけたのは心の中にしまっておこう。

「あ…ああ、ありがとう」

我に返った俺はセフィリアに示された入口をくぐり、中庭へと足を踏み入れる。

中庭と言われた場所は芝生のように刈りこまれた草が茂り、建物との境には垣根のようなものがあつた。

ざっと見たただけでもサッカー場程もある広さの場所が中庭らしい。

「ここは第三中庭だ。他に第一、第二、第四中庭があり、有事の際は避難場所や延焼を避けるために使われる予定になっている」

呆けたように立っている俺に左側からセフィリアではない女性の声が説明してくれた。

女性の声が聞こえた方を向くと、真紅の髪を高い位置で結わい、ポニーテールにした長身の女性が足を揃えて立っていた。

その女性は鎧を着ていた。

俺の眼から見ても変則的だと思われる鎧を。

右足は太ももの中ほどまであるブーツのような形状、左足は膝下までのブーツ状、胴体はほぼすべてを覆っているが左肩から左胸部にかけては鎧がなく黒い服が見えている。

右腕はほぼすべてがおおわれているのに対し、左腕は指先から肘までしかおおわれていない。

重装の右半身と、軽装の左半身。

女神と見まがうほどの美貌は深い緋色の瞳から発せられる眼光により、見る者に美しく鋭利な刀を連想させる。

「あたしはアリーシャ・ラーヴァトム。アーケラルド王国騎士団一番槍隊々長をやっていた」

アリーシャと名乗った女性は鎧同士が接触して発する金属音を一切

出さず、こちらに歩み寄ってきた。

そして俺の前に立つと再び直立し、右の拳を胸の前に当てた。秀囲気から敬礼のようなものだろうと判断する。

「これからあなを叩きのめす者の名前だ。覚えときな」

第五話（前書き）

開いていただきありがとうございます。

第五話

「ほらほら、どうしたあ！あんたの力はそんなもんかい!？」

アリーシャの猛攻をしのぐので精いっぱい俺に挑発が投げられる。こちらは剣一本
対するアリーシャは無手。

変則鎧のためか動きを阻害されているそぶりは全くない。

一応歩兵用と言われる全身鎧を着させられているからダメージというダメージはない。

だが視界が狭く、重い鎧は邪魔なだけだ。

「だー！こんなもん着て動けるか!！」

俺の腹部めがけて真っ直ぐ繰り出された蹴りを剣の腹で受け、振り切るようにしてアリーシャを投げ飛ばす。

間合いが空いた隙に兜を脱ぎ棄てる。

「ちよつと待つとけ!！」

兜を脱ぎ棄てた俺を見て驚いたような表情をしているアリーシャに言葉を叩きつけると、次々に鎧を外していく。

滑り止めを兼ねた小手のみを残し、俺は中庭に連れてきてもらったときの服装に戻る。

「なつ、あんた何を…!！」

何事かを訴えているアリーシャを無視し、入口の方へと足を向ける。跳びあがり、入口の上に掲げられていた長剣を取る。

掲げられていた長剣は長さ、重さはともに刀に近いものであったが、やはり模造品らしく重さのバランスが悪く、刃が存在しない。

「ま、この際文句も言ってられないか」

何度か素振りし、手にした長剣の感覚を掴む。

「行くぞ、隊長さん」

「…ああ、来い！」

一瞬の間ののち、アリーシャは構えを取る。

構えを取ったのを確認した俺は長剣を肩に担ぐように振りかぶり、アリーシャに向かって駆け出す。

何も考えていないかのように、俺は一直線に疾走する。

アリーシャはというと、何を考えたのか構えを取ったその場に留まっている。

「駆け抜ける！切り刻めっ！」

叫びと共に一際強く踏み込み、アリーシャに肉迫する。

そのままの勢いを載せた袈裟斬りを起点とし、右腕一本で乱撃を放つ。

乱撃と言っても真ん中と左右、上中下段の九種を絶え間なく繋げるだけなのだ。

アリーシャは八種の斬撃までは手足につけた手甲、足甲により防いでいた。

いや、俺が防がせていた。

「この程度っ…！」

「はっ、口開けてると舌噛むぜ！」

八種の斬撃を防いだと思い込んでいるアリーシャに警告を発し、彼女の胸部にある防具のもっとも硬いところを見極める。

そして見極めた防具のもっとも硬い箇所に刺突を繰り返す。

八種の斬撃より速い突きは寸分の狙い違わずアリーシャの胸部を守る防具、そのもっとも硬いところに当たり、彼女の体を吹き飛ばす。

「こんなもんでいいか、隊長さん？」

重くバランスの悪い長剣を軽々と肩に担ぎあげ、仰向けに寝転がり地面に背中を付けているアリーシャの元へと歩く。

仰向けに倒れたままのアリーシャを不思議に思い顔を覗き込むと呆然としたような表情になっていた。

「隊長さん？」

肩に担いだ長剣を地面に突き刺すように下ろし、再度アリーシャに呼びかける。

俺の声に我に返ったのかアリーシャは飛び起きるように上体を起こして俺を見上げてきた。

「あなた、何者だ？」

上体は起こしたものの未だ地面の上に座っているアリーシャに、俺は苦笑しながら右手を差し出す。

「姫さんに喚ばれてきたただの異世界人さ。」

差し出した手をアリーシャが握ってくれたので俺は彼女を引き起す。
アリーシャの顔には納得できない書いてあった。

第五話（後書き）

戦闘描写が難しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8245y/>

異世界からの勇者と闇の皇女

2011年12月29日12時16分発行